

一九九一年に起きた雲仙普賢岳災害で家とビニールハウスを流された吉田良一さん・美恵子さんご夫妻がもう一度、菊作りを再開するために選んだのは雲仙市吾妻町だった。新天地で見事に復興を遂げ、変わらず菊作りに邁進しているお二人を十三年ぶりに訪ねた。

ビニールハウスでは、可愛らしい菊の花が収穫期を迎えていた。良一さんによれば、十三年前は八種類ほどだった品種を、今では約三十種類にまで増やしたという。「以前は葬儀用の白菊がメインでしたが、最近では丸いピンポン菊や、華やかなスパイダー菊、スプレー菊と呼ばれる小さな西洋菊など、カジュアルに飾れるものも人気です。種類が増えるとそのぶん手間は増えますが、ニーズに応えたいと思い、徐々に品種を増やしてきました」。

さらに二年ほど前からは、新たな防除技術も取り入れている。「夜に青いUV-Bランプを照射することで、害虫や病気から花を守ります。これにより農薬散布の回数が減るだけでなく、品質の向上にもつながっています」。

順調に栽培が続けてきたよううと嬉しいですね」。

四年前からは後継者として、息子の陽祐さんも一緒に栽培に取り組んでいる。「花を見る力を養うことも必要ですし、経営も学んでもらわなくてはなりません。一人前になるのに、まだ五年はかかりますね」。そう言いながらも良一さんは笑顔だ。

雲仙普賢岳災害から三十四年。

雲仙普賢岳のふもとに広がっている吉田さんのビニールハウス



もう一度、会いたい



雲仙普賢岳災害から復興した菊農家

吉田良一さん・美恵子さん・陽祐さん



ビニールハウスではカンボジアやミャンマーからの外国人技能実習生の姿も見られた。「彼女たちの働きには、本当に感謝していますね」と良一さん



に見受けられたが、大変な時期もあったようだ。「コロナ禍は冠婚葬祭が激減しました。花は売れない、従業員は来られない」と、苦労しましたね。しかし、喜びもあった。令和三年に黄綬褒章を受章したのだ。「大きな励みになりました。自分なんかがいただいてもいいのだろうか」という気持ちもありましたが、花や地域の発展につながると思

すべてを失いながらも、好きな菊作りで人生に輝きを取り戻した良一さんは、こう振り返った。「思えば、被災したのが人生の岐路でした。でも、諦めずにピンチをチャンスに変えられたから、今があるのだと実感しています。あの時、吾妻という土地を選択し、そして多くの方に支えられたことで、良い方向に進んでいったのだと感謝しています」。

「復興」は、二文字で語れるほど簡単ではない。それでも家族で立ち上がり、前に進んできた人の言葉には真実がある。生命力と再生の象徴ともいわれる菊の花。良一さんの生き方は、美しい菊そのものであった。

過去の吉田さん紹介！



No.14

